

アブラハム・タッカーの道德哲学

名古屋学院大学 大村照夫

はじめに

18世紀の道德哲学はきわめて神学的色彩を帯びている。タッカーも例外ではない。神と人間に対する哲学的觀察の中で神学的功利主義思想の一端を切り開き、後続の研究者に道を開いた。

スティーブンはタッカーのこの研究方法を次のようにまとめている。

「彼はロック流の合理主義者であって、何章にも渡る退屈するほど長たらしい論証の中で、キリスト教の神秘的ドグマを合理主義的解釈に適應させようと骨を折っている。変わりばえしない方法で、彼は三位一体、贖罪、人間墮罪、聖餐などの教養を、最後には純粋な理神論者にまで雑作なく受け入れられるような解釈をほどこすが、この危険な試みにおいて当然のことながらタッカーは、きわめて異端的な命題へと無意識的に落ち込むこととなる。彼のこの調停の基本的方法は特徴的である。」中野好之訳『十八世紀イギリス思想史』(中) 筑摩書房、288ページ。

タッカーの神学に対する見解は、宗派の対立から彼の死後2版において展開されている。このような彼の神学論を踏まえてタッカーの道德哲学を概観し、その中から功利主義思想に結びつく理論を抽出しよう。

タッカーは宗教や道德哲学が人々の幸福に役立つという理由からこれらを研究の対象とする。

「宗教と道德学は、人々の現在の幸福と将来の期待について考えてみると、全ての境遇と宗派の人々にとって普遍的な関心事であり、何事も真剣に考えようとする人々の思考を常にひきつけてきた。」Abraham Tucker, *The Light of Nature*, Vol.1, Part1, 1768, p.

タッカーは神学や道德哲学が人々の幸福に役立つ理論を構築しようと努力する。その方策を検討するのが『自然の光明』の使命である。彼は哲学的検証という回り道を選ぶ。彼の哲学好きは生来のものであり、理性によって従来をの哲学を検証しなおす。タッカーは理性の役割をことのほか強調する。

「理性はわれわれのために何かをしてくれるということをさまざまな方面から認められるので、理性でできる物事をそれが多くても少なくとも利用しよう。これは、もしそのようなものが手に入るならば超自然的な助力からそれ以上の利益を受けることに確かにわれわれを促す。そのような試みはどちらの当事者も怒らせないのはもっともである。というのは、もし理性が十分であれば、理性の声を注意深く聞く以上にうまく何ができるであろうか？」 Ibid.,p,xii.

タッカーの理性による社会現象の検証にはその結論が役立つことが必要であることを強調する。その社会理論が効用を持つことが肝要である。いかにきれいな理論であれ役に立たなければ何もならない。タッカーは哲学の効用という便宜性に着目し功利主義への第一歩を踏み出すことになる。

「したがってこれらの源泉から我々の資料を引き出さなければならない。そこで十分な資料を在庫してしまうと、抽象的な推論を敵視しないで、常に目を効用に向け、時折事実を参考にして私の理論を正し、できる限り望ましいかたちで資料を追求しなければならない。」 Ibid.,p.xxviii-ix.

タッカーは旧習やしきたりで彩られた道徳を見直し、人々の生活の便宜に役立つ哲学を模索する。人間の行動原理にまでさかのぼって快楽や満足を選考する行動様式を模索する。タッカーのこの方法論がウィリアム・ペイリーの目に留まり、彼の神学的功利主義思想の礎石を提供したといえる。

1 精神、動機、行動について

人間の構造は精神と肉体の複合物である。精神活動によって人間は考え手足を動かし、行動する。タッカーは精神の機能をロックから学んだ意志と理解力に凝縮して考える。意志によって行動し、理解力によって行動の善悪を判断する。両者は合体して思考を生み、想像によって周囲の状況を見極める。タッカーは孔雀の事例をあげて次のように説明する。

「従ってその最後の実態（孔雀）は、それがどのようなものであれ、直接われわれに感動を与えるものであり、すべての視野の中でわれわれの精神に作用する作因である。そこで同様な方法でわれわれの識別に役立つ修正された実態は、すべての精神的熟考の場合における作因である。その変

態をわれわれは着想と呼ぶ。しかし着想が遂行する作用以上に実態についてより以上のものを知らないの、したがってわれわれが理解されるように話すならば、その着想はわれわれが識別する事物であるという意外に言い得ない。」Ibid.,p.18.

精神が存在するところにさまざまな動機がある。動機が精神を動かし意志行為に向かわせる。その意味で人間行為の主要な源泉である。動機のないところに意志行為はない。

「発条がなければ動かない機械作りのエンジンやエンジンを動かす他の原動機から考えられる隠喩によって、われわれは通常この最後の原因を動機と呼ぶ。そこで行為は通常適切な動機の示唆に基づいて生じるということがわかるので、動機が精神を機能させるということを納得する。かくて同様な図式によって精神がしばしば秤と比較され、動機がどちらかを目盛りに振れるのである。しかしこの比較を精神に適應するならば、精神の意志行為におけるよりも精神の理解力の行使において、その比較は精神によりうまく適合すると思われる。というのは、判断は目盛りにおいてどちらに傾くかを試すために動機をつりあわせるからである。意志行為は目方が決定されるまでは続いて起こることはない。」Ibid.,pp.78-9.

タッカーは動機を形成する主要な要因を快楽に求める。例えば国王が議會を召集する場合、国王の行為は意志と快楽に結び付けて考えられる。国王がある判断の下に議會召集の意志を持つ際にこの意志は、しばしば快楽と同義語とみなされる。国王は自らの快楽のために議會を招集するのである。

「われわれはしばしば意志と快楽を同義語として結び付けないだろうか？快楽とは精神の行為ではなくて精神の感覚であり、それがわれわれの活動力に関係し得ない機会においてこの表現を用いる。議會が召集されるのは意志と快楽である。これは国王の機能とどのような関係があるのか？構成員は彼ら自身の行為を手に入れなければいけない。彼らは国王から活動も活動力も引き出せない。ああ！しかし国王は彼の快楽を表す行動を行うに違いない。」Ibid.,pp.26-7.

2 効用

自然は吝嗇である。人間が生活するうえで必要なものはほとんど労働によって得られる。享樂の素材は人間の創意と工夫によって獲得される。この素材は人々の生活に役立つという効用を持ち、効用は人々の快樂や満足に貢献する。

「そこで享樂の素材は多くの場合享樂それ自身でないのと同様に希望してもたれるものでもないが、しかし享樂を手に入れるための他の素材を必要とする。それゆえに効用は効用から成長する。というのは、有用なものの取得に貢献するものは何でもその説明に基づいてそれ自身有効となる。かくて生活の便宜品がそれらが常に提供する安樂や喜びのために有用であるならば、貨幣もまた有用である。というのは貨幣はそれらの便宜品を購入するからである。」 Ibid., Vol.1, Part2, p.123.

正義の原理も便宜の原理から派生する。所有権の侵害や取引の不履行においては正義の原理に基づいて損害の補填が義務付けられる。こういった処罰の効用は被害者に満足を与え、正義の原理に対する感謝の念を起こさせる。

「つまり、自然は人類の間に共通して大地とそのすべての生産物を与えた。そして財産の上に生じるすべての改良を伴う秩序を維持し、勤勉を刺激する財産の必要性のため以外に存在してこなかっただろう、と。これらの利益に対する見解はわれわれ全てに正義に対する愛好を吹き込む。しかしそれは他人において見分けられる場合である・そこで確かに誰もが正しくわれわれに振舞うこと以上に便宜であるものは何もない。」 Ibid., p.127.

3 快樂

快樂の源泉は好みであり、この好みの対象は美である。ある人にとって美しいものはその人を楽しませ、快樂を増加させる。タッカーは美の源泉を 作品、 継承、 翻訳、 表現に分類している。

作品

「すばらしい建物の素材はその適切な場所に配置されるまでは人の目を楽しませてくれない。色彩の小包は元来人の心を打つものでなく、ものめずらしく取り揃えられ配置されると空想をかきたてられる。釣合い、比率、秩序は事物のよき見栄えに大いに貢献する。」 Ibid., p.104.

継承

乗馬や散歩は最初は楽しいものであるが、長く継続すると嫌気が差す。したがって散歩のコースを変えるとか少し休むとかするものである。

翻訳

人の感動を呼ぶ小説や貴重な経験はアニメや映画になり、更なる人々の感動を呼ぶ。

表現

美に対する4番目の源泉は美の対象をいかに表現するかである。あまりに派手に表現すると飽きられるし、かといって地味に表現すると目立たない。魅力的な優雅さを表現することは一種の美意識の上手な別の表現の仕方である。

次に、タッカーは快樂の量や質を吟味する。しかしその測定の困難さを強調する。

「しかしどの快樂も欲望を同じように生き生きと保たれないし、どの欲望も享樂という等しい生産物を生まないだろう。これは快樂の科学をわかりにくいものにする。人々は熱心に最も情熱的なものを追及する。もっと多くの人々のことを考えると彼らはよりよいものを獲得できるが、彼らの計算方法によればこの点で失望させられる。というのは、彼らは少年のように次のように考えるから。つまり、門の上の時計が15分進み大きな楽しみを与えると、5時間の経過は20倍の楽しみを与えるに違いない、と。しかしこの科学において採用される計算は通常の計算とはかなり違う。2たす2は必ずしも4にはならない。」Ibid.,pp.119-20.

5 満足

タッカーは快樂や苦痛（不安）をロックにならって、満足という用語に統一しようとする。つまり食卓一杯のご馳走や楽しい読書というプラスの満足から空腹や病気といったマイナスの満足まで、快樂や苦痛を満足度で測定する。この満足度は幸福のバロメーターである。

「快樂は通常の評価に於いて業務や義務においてわれわれは仕事を全うする義務感、自己礼讃、自己満足を感じる。通常いわゆる快樂はしばしばその勢いを失うものである。快樂は繰り返しのよって飽き飽きさせ

られ、愛好に代って嫌気を起こす。したがって、ロック氏は仕事において娯楽と同様に、深慮ある仕事において愛好の衝動と同様に、感じるすべての満足を理解すれば、その用語により広範囲な概念として満足を当てた。」 Ibid.,Vol.1,Part1,p.98.

人は満足に対する期待から行動する。得られるであろう満足のために努力し、仕事に励む。

「もっとも高価な快楽はめったにわれわれの口には入らない。しかしその快楽を享受するための準備として多くのことをしなければいけない。そのための準備は仕事の性格と同じである。というのは、ある企画に着手する際にどんなに生き生きと期待を享受しようと、期待は長い仕事の過程で元気を継続し得ないからである。」 Ibid.,p.98.

しかし期待はしばしば裏切られることが多い。夜蠟燭を持って遊びに行く少年は仲間を驚かそうと期待したのであるが、あてがはずれ道に迷わなかっただけである。

「蠟燭を持って遊びに行く子供は快楽を期待したが、よく気が利くだけであることがわかった。彼は影を見て走り去る臆病者が彼を攻撃しないだろうといういたずらを期待したのである。」 Ibid.,p.106.

とはいえ人間は期待に行動の動機を求める生き物である。期待のために辛抱し、努力する。したがって人間は期待に胸を膨らませて努力する過程が華なのかもしれない。

「というのは、享楽は一般にわずかな時間のみ継続する。しかし期待と希望とうまく行った追求は長い期間一定の喜びのファンドをわれわれにしばしば提供する。」 Ibid.,p.111.

参考文献

Abraham Tucker, *The Light of Nature*, 1768, 1805 (2 nd ed.)

拙著『アブラハム・タッカー研究序説』晃洋書房、2003年